

修正アルカド・テストを用いての飲酒慣行の検討

岡山大学医学部衛生学教室 (主任教授: 大平昌彦)

古 市 圭 治

(昭和52年11月29日受稿)

I 緒 論

アルコール飲料による健康障害の予防は、欧米諸国において公衆衛生の重要な課題とされている。殊にアメリカにおいては、従来から Alcoholism は、Accident, Absenteeism と共に、企業における 3A 問題として、産業衛生の分野において重視されてきた¹⁾²⁾が、単に生産活動への影響のみにとどまらず、アルコール問題は交通事故³⁾⁴⁾をはじめ都市における失業や犯罪等とも密接にかかわる⁵⁾⁶⁾重大な社会問題とされており^{7)~9)} アルコール中毒或いは問題飲酒者とみなされる者の数も、成人人口の7%にあたる900万人に達すると推定されている¹⁰⁾¹¹⁾

わが国におけるアルコール消費量は、欧米諸国と比較して少なかった¹²⁾が、近年急速に増加¹³⁾してきており、殊に女性と若い年齢層における飲酒人口の増加が著明¹⁴⁾である。また、アルコール飲料の種類も多様化¹⁵⁾してきており、このような動向は、清酒を主体としたわが国の伝統的な飲酒習慣¹⁶⁾に変化をもたらすと共に、アルコール飲料の影響がより大きな社会問題となることを想定させる。

アルコールの身体的、精神的影響については、肝疾患増加との相関性の検討^{15)~17)}をはじめ、産業医学^{18)~21)}精神医学²²⁾²³⁾の立場からも検討されているが広く公衆衛生の問題として重視されてきた¹⁵⁾²⁴⁾²⁵⁾のはごく最近のことであり、わが国における飲酒の実態についても十分な把握がなされていない。従来、日本人の飲酒の実態に関する調査はいくつか行われているが、それらの多くは、特定の職業集団²⁶⁾²⁸⁾²⁷⁾或いは小地域集団^{28)~30)}を対象としたものであり、一般地域住民を対象とする広域的な調査^{15)31)~34)}は極めて少なかった。社会のアルコールに対する態度が

その国におけるアルコール依存のあり方に密接にかかわっており³⁵⁾個人的な飲酒慣行のみならず、その者の属する集団の飲酒慣行を同時に明らかにしていくことが重要である。本研究は、一般住民を対象とした広域的な調査により、飲酒頻度と飲酒行動との関係を中心として、社会における飲酒慣行の実態を、個別的並びに集団的に明らかにすることを目的とした。

II 調査方法

1. 調査対象

岡山県下の市街地を除く農村部を対象地域とし、昭和48年3月調査を実施した。調査対象者の抽出は電話帳を用い、県下を南東部、南西部、北東部、北西部の4地域に区分し、各地域内の電話局を選び、その個人加入者数に比例して無作為に抽出する方法を用いた。これらの調査対象者1030名に郵送法により調査票を配布し、558名について回答が得られた。地域別の調査対象者数及び回答数は Tab. 1 のとおりであり、各地域ともほぼ半数の回答率であった。回答が得られた者の性・年齢階級別分布は Tab. 2 に示すごとくである。調査結果の分析は、年齢、飲酒頻度が不明の者及び少数であるため女子を除き、男子519名について行った。

2. 調査内容

Manson³⁶⁾によりつくられた60質問項目からなる Alcadd Test (Alcoholic Addiction Test) を、昭和48年文部省総合研究(A)「問題飲酒の疫学的研究」班が日本の実情に則して改訂し39質問項目に整理した修正アルカド・テストを用いて調査を行った。調査項目は、性、年齢、職業、結婚などの属性に関する項目と、飲酒頻度(問1)及び Tab. 7 に示すとおり

Table1 Response Rate

Residence	Object		Response		Rate
	No	%	No	%	%
South East	464	45.0	255	45.7	55.0
South West	176	17.1	83	14.9	47.2
North East	246	23.9	134	24.0	54.5
North West	144	14.0	86	15.4	59.7
Total	1030	100.0	558	100.0	54.2

Table2 Distribution of Response Classified by Sex and Age

Sex	Age	10-19	20-29	30-39	40-49	50-	Unclear	Total
		Male	No	12	71	142	154	147
	%	2.2	13.2	26.4	28.6	27.3	2.2	100.0
Female	No	1	0	6	6	7	0	20
	%	5.0	0	30.0	30.0	35.0	0	100.0

の飲酒に対する考え方・行動などに関する質問(問2～問39)である。

III 調査結果とその考察

1. 飲酒頻度

飲酒頻度については Tab. 3 に示すごとく、A群「のまない又はのめない」は 10.8%、B群「殆んどのまない(月に数回から年に数回)」は 29.7%、C群「以前のんだが現在はのまない(少なくとも半年以前から)」は 5.4%、D群「毎週3日以下必ずのむ」は 10.6%、E群「毎週4日以上必ずのむ」は 6.5%、F群「毎日のむ」は 37.0%であった。酒を飲む者の割合すなわち飲酒率は 83.8%であるが、B群は習慣的な飲酒傾向をもたない、いわば機会性飲酒者と考えられ、従って飲酒習慣をもたない者(A+B+C)は 45.9%であり、飲酒習慣を有する者(D+E+F)は 54.1%であるといえる。首都圏の一般住民を対象として昭和51年に行われた余暇開発センターの調査報告¹³⁾によると、男子の飲酒率は 84.6%、毎日飲む者 30.6%を含めて飲酒習慣を有する者は 59.6%であり農村部を対象とした本調査と比較して、飲酒率及び飲酒習慣を有する者の率はほぼ同率であるが、毎日飲む者の率は本調査の方が高いことが認められた。日本人の飲酒の実態について広域的に調査した報告は少ないが、昭和43年の国税庁世論調査¹⁷⁾及び昭和45～46年の額田ら¹⁸⁾の調査によると、男子の飲酒率はそれぞれ74%、88.8%であり、飲酒習慣を有する

者の率はそれぞれ64%、69.0%である。調査対象や調査方法の相違はあるが、これらの調査結果から飲酒頻度の推移をみると、男子の飲酒率は近年増加しているが、これは専ら機会性飲酒者であるB群の増加によるものであり、習慣的な飲酒者の占める率にはそれ程の変化は認められない。

調査対象者の属性の相違による飲酒頻度の分布は Tab. 4 に示すごとくである。

年令階級別にみると、機会性の飲酒者は20才台以下で著明に多く、飲まない者は年令の上昇に従って増加する。飲酒の習慣を有する者は30才台で64%と最も多く、以後年令の上昇に伴って減少するが、毎日飲酒者は40%前後で変わっていない。国税庁世論調査¹⁷⁾と比較すると、B群が全年令階級にわたって増加しているが全体の増減傾向は同じであり、年令階級別の飲酒頻度のパターンは、昭和43年当時と変わっていないことが認められた。

学歴別にみると、小学校卒では飲酒頻度が低く、飲まない者の占める率は学歴が高くなるに従って少なくなることが認められた。

結婚及び子供の数と飲酒頻度の関係については、一定の傾向が認められないが、既婚で現在別居している者と4人以上子供のいる者において毎日飲酒者の占める率が高かった。

職業別には、サービス業、事務職、農林漁業、筋肉労働の順に飲酒習慣が強まる傾向が認められた。

2. 修正アルカド・テストの検討

Table3 Distribution of Frequency of Drinking

Groups	No	%	
A: Never	56	10.8	45.9
B: Scarcely	154	29.7	
C: Abstained	28	5.4	
D: 1 - 3 days a week	55	10.6	54.1
E: 4 - 6 days a week	34	6.5	
F: Everyday	192	37.0	
Total	519	100.0	

Table4 Comparison of Attributes by Frequency of Drinking

Attributes		Groups		Frequency of Drinking						Total	
				A	B	C	D	E	F		
				10.8 %	29.7 %	5.4 %	10.6 %	6.5 %	37.0 %	100.0 %	N = 519
Age Group	- 19	8.3	58.3	16.7	8.3	0	8.3	100.0	12		
	20 - 29	4.2	38.0	4.2	18.3	7.0	28.2	100.0	71		
	30 - 39	9.2	22.0	5.0	12.1	9.2	42.6	100.0	141		
	40 - 49	11.1	30.7	5.2	10.5	5.2	37.3	100.0	153		
	50 -	15.5	29.6	5.6	5.6	5.6	38.0	100.0	142		
School Career	- 6	20.0	34.3	5.7	2.9	5.7	31.4	100.0	35		
	7 - 9	12.5	27.9	4.6	9.6	6.7	38.8	100.0	240		
	10 - 12	8.7	28.8	6.0	12.5	6.0	38.0	100.0	184		
	13 -	5.0	36.7	6.7	13.3	8.3	30.0	100.0	60		
Marital Status	Single	0	62.5	0	25.0	0	12.5	100.0	8		
	Separated	14.3	28.6	0	0	0	57.1	100.0	7		
	Married	14.1	29.7	7.8	12.5	6.3	29.7	100.0	6		
	1 Child	11.1	27.8	5.6	8.3	2.8	44.4	100.0	36		
	2 Children	10.6	30.6	7.1	11.2	8.2	32.4	100.0	170		
	3 Children	10.5	31.5	2.1	11.9	7.0	37.1	100.0	143		
Occupation	4 Children	9.9	23.1	6.6	6.6	5.5	48.4	100.0	91		
	Office Work	7.3	31.8	6.0	13.2	9.3	32.5	100.0	151		
	Fishing, Forestry and Agriculture	11.9	30.3	5.0	9.5	5.5	37.8	100.0	201		
	Muscle Work	6.9	28.7	5.7	12.6	3.4	42.5	100.0	87		
	Service Work	18.6	27.1	5.1	8.5	8.5	32.2	100.0	59		
Others	19.0	19.0	4.8	0	4.8	52.4	100.0	21			

調査に用いた修正アルカド・テストの38の質問項目について、Tab. 7に示すごとく、「はい」或いは飲酒傾向を示す回答をした者を肯定的回答者、「いいえ」或いは飲酒傾向を示さない回答をした者を否定的回答者とし、また、各々の回答者について肯定的回答数をその者の得点数として、テストの結果

を検討した。

1) 飲酒頻度と得点数

飲酒頻度の異なる群別に、得点数階級別の回答者数を%になおしてその分布をみると、Tab. 5に示すごとくである。得点数0の者、すなわち38の質問項目すべてに否定的回答をした者は、全体の10.2%

であるが、これらはすべて飲酒習慣をもたない A, B, C 群に属している。これに対して得点数 15 以上の者は全体の 11.6% であり、すべて飲酒習慣を有する D, E, F 群に属しており、両群の間でその分布には明らかな差が認められた。また得点数 20 以上の者、すなわち 38 項目の質問に対して 1/2 を越えて肯定的な回答をした者は、E 群 2 名、F 群 10 名であり、全体の 2.3% であった。全体の平均得点数は 7.3 であるが、飲酒頻度の群別にみると、A 群 1.2, B 群 3.4, C 群 4.2, D 群 8.2, E 群 10.4, F 群 11.9 と飲酒頻度の高い群ほど平均得点数は増加し、この結果、飲酒習慣をもたない (A+B+C) 群の 3.0 に対して飲酒習慣を有する (D+E+F) 群は 11.0 と平均得点数において 3 倍以上大きいことが認められた。

飲酒習慣をもたない群のなかで、(A+B) 群と C 群では、得点数における分布は同じであると認められるが、平均得点数は前者の 2.8 に対して後者は 4.2 であり、 X^2 -test によると C 群が有意に大きかった ($p < 0.01$)。同様に、飲酒習慣を有する群のなかにおいても、(D+E) 群と F 群では、得点数における分布は同じであると認められるが、平均得点数は前者の 9.0 に対して後者は 11.9 であり、F 群が有意に大きかった ($p < 0.01$)。

以上の点から、飲酒に対する考え方、飲酒傾向は大別して飲酒習慣をもたない群 (A+B+C) と有する群 (D+E+F) によって相違し、更に飲酒習慣をもたない群は (A+B) 群と C 群により、飲酒習慣を有する群は (D+E) 群と F 群によりそれぞれ特性が相違していると考えられる。

2) 肯定的回答者群と否定的回答者群との比較

38 項目の各質問について、肯定的回答者群と否定的回答者群の間に飲酒頻度の異なる A, B, C, D, E, F 群の分布に差があるかどうかを X^2 -test によりみると、問 3, 9, 17, 20, 24, 31 の 6 項目を除き有意差が認められた。

(1) 有意差の認められなかった 6 項目のなか、問 20: 金が入れば必ず飲み歩く、問 24: しらふだと落ちつかない、問 31: 休みの前日には酒びたりになる、の 3 項目は肯定的回答者の絶対数が少なく、全体の 1~1.5%、毎日飲酒者 (F 群) においても 1~2% と極めて少なかった。

問 3, 9, 17 の 3 項目は、肯定的回答者がそれぞれ全体の 10.2%, 23.7%, 39.4% あったが、飲酒頻度の相違とは無関係に肯定的回答をする者が一定限度いる項目であり、飲酒慣行をみる質問としては不

適切な質問といえよう。すなわち、問 3: 私が酔っぱらうのはそれなりのわけがある、という項目に対しては、飲酒頻度の少ない者も、酔う時はそれなりのわけがあると一般論として肯定的に答えることが想定されるし、問 17: 親友に大酒飲みがいる、という状態も本人の飲酒頻度とは直接関係がない。また、問 9: 私はいつも自分のペースで飲む、という項目は、「ペースがきまっていない」という答を飲酒傾向のある肯定的回答としているが、飲酒頻度の少ない者の方が毎日飲酒者よりもペースがきまっていないと答える傾向があるためと考えられる。

(2) 5% 以下の危険率で有意差が認められたものは、問 22: うさばらしに飲む、問 35: 年に二、三度はバカ騒ぎをして二、三日飲み続ける、問 39: 飲んでではないとき酒をすすめられてもことわる事ができる、の 3 項目である。これらはいずれも肯定的回答者が少なく、それぞれ全体に対して、7.5%, 3.1%, 5.6% であった。

(3) 以上に記した 9 項目を除く 29 項目についてはいずれも 1% 以下の危険率で有意差が認められた。

有意差の認められた 32 項目を否定的回答数と肯定的回答数との比率によって分類すると Tab. 6 に示すごとくである。これらの 5 群については I 群から V 群に移るに従って飲酒傾向と関係を持ちながら肯定的回答者が増加してくることになる。肯定的回答者が少ない質問項目ほど一般社会人の飲酒慣行からかけ離れた慣行を示す項目といえる。I 群、II 群及び問 20, 24, 31 は飲酒慣行の個別的な弁別に有用と考えられる。額田ら³⁹⁾は修正アルカド・テストに質問項目を追加し、断酒連役員と対照集団について調査を行い、両群をよく判別する質問として 10 項目を報告しているが、問 20, 24, 31, I 群の問 12, 19, 28, 35, 39, II 群の問 13 の 9 項目がその中に含まれている。これに対して、III 群から V 群にすすむにつれて飲酒慣行の個別的な弁別性はなくなるが集団的な弁別性は高くなっていくといえる。従って飲酒慣行の個別的・集団的弁別には、問 20, 24, 31 及び I 群から V 群の質問項目を適切に配分して用いることが有効と考えられる。

公衆衛生における screening process のもつ意味について、大平³⁹⁾、青山⁴⁰⁾ は単に異常者の発見にとどまらず、問題点とその解決策の発見方法としての重要性を指摘している。社会文化的環境と密接な関係を有する飲酒慣行の調査においては、個人的な飲酒慣行と同時に、その者の属する集団の飲酒慣行を

Table 5 Scores on the Alcadd Test

Group	A	B	C	D	E	F	A+B	A+B+C	D+E	D+E+F	Total
	N=56 100%	N=154 100%	N=28 100%	N=55 100%	N=34 100%	N=192 100%	N=210 100%	N=238 100%	N=89 100%	N=281 100%	N=519 100%
0	48.2	14.9	10.7	0	0	0	23.8	22.3	0	0	10.2
0 - 4	92.9	71.4	46.4	20.0	8.8	7.3	77.1	73.5	15.7	10.0	39.1
5 - 9	7.1	26.0	50.0	38.2	47.0	24.0	21.0	24.4	41.6	29.5	27.6
10 - 14	0	2.6	3.6	32.7	23.5	43.2	1.9	2.1	29.2	38.8	22.0
15 - 19	0	0	0	9.1	14.7	20.3	0	0	11.2	17.4	9.4
20 - 24	0	0	0	0	2.9	3.1	0	0	1.1	2.5	1.3
25 - 29	0	0	0	0	0	2.1	0	0	0	1.4	0.7
30 - 34	0	0	0	0	2.9	0	0	0	1.1	0.4	0.2
Mean Score	1.2	3.4	4.2	8.2	10.4	11.9	2.8	3.0	9.0	11.0	7.3

Table 6 Classification of Questions by the Ratio of Non alcoholic responses to Alcoholis responses

Group	$\frac{\text{Non alcoholic responses}}{\text{Alcoholic responses}}$	Question Number in Revised Alcadd Test
I	10 -	5. 12. 14. 19. 26. 28. 29. 22. 35. 39.
II	5 - 9	13. 16. 23. 27. 32. 34. 38.
III	2 - 5	10. 11. 15. 25. 30. 33. 36. 37.
IV	1 - 2	2. 4. 7. 18. 21.
V	- 1	6. 8.
Statistically significance by X^2 -test		P<0.01 P<0.05

明らかにすることが特に重要と考えられる。

3) 飲酒頻度と肯定的回答者の出現率

飲酒傾向の異なる A, B, C, D, E, F の 6 群について、(A+B)群, C群, (D+E)群, F群の 4 群に分けて、各 2 群間で問 3, 9, 17, 20, 24, 31 の 6 項目を除く 32 項目の質問について、肯定的回答の出現率に有意差があるかどうかについて X^2 -test により検定した (Tab. 7)。

(1) (A+B)群 : C群

(A+B)群と C群の間においては、問 13, 25 の 2 項目で 1% 以下の危険率で、問 38 は 5% 以下の危険率で有意差が認められたが、その他の項目では有意差は認められなかった。なおこれら 3 項目について、C群と (D+E)群, F群の間には有意差は認められなかった。これらの項目はいずれも飲酒の上での失敗事に関する質問であり、特に問 13: 酒のうえで事故や争いを起こした事がある、に対しては、C群は 32.1% と肯定的回答率が 6 群中で最も高く、過去における酒

のうえでの失敗の経験から飲酒を止めた者の多いことがうかがえる。なお問 33: 人は私を大酒飲みだと思っている、に対して、C群は現在飲んでいないにもかかわらず肯定する者が約 14% に認められた。C群は過去における飲酒に関する質問項目については D, E群と、それ以外の質問項目については A, B群と同様の回答傾向を示す群であることが認められた。

(2) (A+B)群 : (D+E)群, F群

(A+B)群と (D+E)群の間においては、問 4, 6, 8, 10, 11, 13, 16, 18, 21, 22, 23, 25, 27, 33, 36, 38 の 16 項目で 1% 以下の危険率で、また問 5, 32, 37 の 3 項目では 5% 以下の危険率で有意差が認められた。なおこれら以外の項目のなかでも問 2, 7, 12, 15, 19, 26 の 6 項目は、(A+B)群において肯定的回答者が 0 または極めて少数であるため、両群の間に差を認めることができると考えられる。

(A+B)群と F群の間においては、問 4, 6, 8, 10, 11, 13, 16, 18, 21, 23, 25, 27, 30, 32, 33, 34,

36, 37, 38の19項目で1%以下の危険率で、問22, 29の2項目では5%以下の危険率で有意差が認められた。また(A+B)群に肯定的回答者が0または極めて少数のため、F群との間において差を認めることができると考えられる項目は、(D+E)群の場合と同一の問2, 7, 12, 15, 19, 26のほか問28, 29があり、8項目であった。なお問14:飲むとよく眠れない、に対する回答のあらわれ方はやや特異であり、「眠れない」とする肯定的回答は(A+B)群に約20%認められたが(D+E)群、F群には殆んど認められず、Alcadd Testの原著³⁶⁾とは反対の成績を示した。従って問14に対する肯定的回答としては「眠れる」とすることが妥当と考えられる。

全体では32項目のなか(A+B)群と(D+E)群の間では26項目、F群の間では30項目において肯定的回答率に差が認められた。(D+E)群のみと差が認められたものは、問5:酒を飲むと家に帰らないことがある、の1項目であり、F群のみと差が認められた項目は、問28:朝から酒がいる、問29:いつも、二杯飲んでから仕事にかかる、問30:仲間と飲むより一人で飲む方がよい、問34:酒を飲むより他に楽しみがある、問39:飲んではならないとき酒をすすめられてもことわる事ができる、の5項目であった。

(3) (D+E)群:F群

(D+E)群とF群の間においては、問2, 4, 6, 7, 11, 15, 18, 21, 33, 34の10項目で1%以下の危険率で、問10, 30, 32の3項目で5%以下の危険率で有意差が認められた。また問28:朝から酒がいる、問29:いつも、二杯飲んでから仕事にかかる、問39:飲んではならないとき酒をすすめられてもことわる事ができる、の3項目では、(D+E)群においても肯定的回答者は0か極めて少数であるが、F群にはそれぞれ10%前後認められ、これらの質問に対する肯定的回答は、毎日飲むF群に特異的であり、アルコール依存の傾向を示す項目と考えられる。

以上のように各群間における肯定的回答の出現率の相違からみて、これらの質問項目は全体として飲酒習慣をもたない群と有する群とをよく弁別すると同時に、各群の飲酒慣行の特長を明らかにし得ることが認められた。

4) D群, E群, F群の飲酒慣行

飲酒習慣を有する群においても、飲酒頻度の相違によって質問に対する肯定的回答の出現率に相違が認められたが、それらの回答状況によりD, E, F群の飲酒慣行の特長を検討した。

Manson³⁶⁾はAlcadd Testにより飲酒慣行の特長を①飲酒の規則性(Regularity of drinking)②飲酒嗜好(Preference for drinking over other activities)③抑制のない飲酒(Lack of controlled drinking)④飲酒の合理化(Rationalization of drinking)⑤情緒過剰(Excessive Emotionality)の5群に分類するとともに、60の質問項目を5群に対応させ、Alcoholicsと、Abstainer 或いはSocial Drinkerとの間ではいずれの群においても平均点数に大きな差があるとしている。佐々木³⁶⁾は修正アルカド・テストを用いて同様の分類による調査を行い、D, E, F群に共通して多いのは「合理化された飲酒」について「何事よりも飲酒に親しむ」であり、「抑制のない飲酒」は最も少ないと報告している。しかし、このMansonによる60項目の5群への分類は、日本人の飲酒の実態からみて必ずしも適切なものとは考えられない。例えば問4:酒がのどを通る感じはすばらしい、問16:以前にくらべると最近酒量が大幅に上がった、問30:仲間と飲むより一人で飲むほうがよい、は「抑制のない飲酒」に分類されているが、わが国の飲酒習慣からみた場合、問4, 30は「飲酒嗜好」とみるのが妥当であろうし、問16を「抑制のない飲酒」に分類することにも無理があると思われる。

従って本調査においては、修正アルカド・テストの38項目を、①飲酒の規則性に関する項目(6, 7, 9, 15)②飲酒嗜好に関する項目(2, 4, 10, 11, 18, 19, 21, 30, 32, 34)③社会的に問題とされる飲酒行動に関する項目(5, 20, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31, 35, 38, 39)④その他の項目(3, 8, 12, 13, 14, 16, 17, 22, 23, 33, 36, 37)に分類し、それぞれの項目における肯定的回答のあらわれ方により、D, E, F群の飲酒慣行の特長を検討した。その結果はTab. 8に示すごとくであり、「飲酒の規則性」に関する項目では、4項目のなか3項目においてF群の肯定的回答率が最も高い。問9はE群に肯定的回答が多いが、この項目に対する肯定的回答は飲酒ペースの不規則性を示すものであり、「私はいつも自分のペースでのむ」という規則性ある飲み方をする者は矢張りF群に最も多かった。また、「飲酒嗜好」に関する10項目については、問19がD群、問21がE群である他、8項目はF群の肯定的回答率が最も高かった。これに対して「問題飲酒行動」に関する12項目については、問5はD群、問28, 29, 35, 39はF群であるが、その他の7項目ではE群において肯定的回答率が最も高かった。「その他」の項目で

Table7 飲酒頻度による肯定的回答率の比較検討

修正アルカド・テストの質問項目	肯定的回答	飲酒頻度による比較 ¹⁾				F 回答率 の肯定 的 (%)
		A+B : C	A+B : D+E	A+B : F	D+E : F	
問2 私は酒を飲むよりごちそうを食べるほうがよい.....	のむほうがよい		○	○	★★	70.8
問3 私が酔っばらうのは、それなりのわけがある.....	はい					10.4
問4 酒がのどを通る感じはすばらしい.....	はい	★★	★★	★★	★★	68.8
問5 酒を飲むと家に帰らない事がある.....	はい	★			(○)	2.1
問6 私が飲むのは、つきあいの時だけである.....	そうではない	★★	★★	★★	★★	89.5
問7 いつも決まった時刻に飲む(晩酌をするなど).....	はい		○	○	★★	88.0
問8 酒を飲むと人と気楽につきあえる.....	はい	★★	★★			80.1
問9 私はいつも自分のペースで飲む.....	ペースはきま っていない					23.4
問10 食事をするなら、酒の飲める店です.....	はい	★★	★★	★		51.0
問11 元気を出すには飲むのが一番だ.....	はい		★★	★★	★★	61.5
問12 飲むようになってから、かなり性格が変わった.....	はい		○	○		11.5
問13 酒のうで事故や争いを起した事がある.....	はい	★★	★★	★★		20.3
問14 飲むとよく眠れない.....	眠れない	(○)	(○)	(○)		1.6
問15 毎週必ず1升(日本酒・ウイスキーなら1瓶)はのむ.....	はい		○	○	★★	55.2
問16 以前にくらべると最近酒量が大幅上った.....	はい		★★	★★		15.6
問17 親友に大酒飲みがいる.....	はい					40.6
問18 飲むのは人生を楽しむためだ.....	はい	★★	★★	★★	★★	71.9
問19 近くの酒屋でよく一杯やる.....	はい		○	○		8.9
問20 金が入れば必ず飲み歩く.....	はい					2.1
問21 飲む機会があれば必ず飲む.....	はい		★★	★★	★★	62.0
問22 うさばらしに飲む.....	はい		★★	★		8.9
問23 少し飲むとやすうけあいをしてしまう.....	はい		★★	★★		11.5
問24 しらふだと落ちつかない.....	落ちつかない					2.1
問25 飲んだ時のことを思い出せないことがある.....	あ	★★	★★	★★		39.6
問26 週に一、二度は大いにメートルをあげる.....	あ		○	○		8.3
問27 時をかまわず飲むことがある.....	あ		★★	★★		25.0
問28 朝から酒がいる.....	い			○	○	10.4
問29 いつも一、二杯飲んでから仕事にかかる.....	はい			○	○	7.3
問30 仲間と飲むより一人で飲むほうがよい.....	はい			★★	★	28.1
問31 休みの前日は酒びたりになる.....	はい					1.0
問32 酒をのまない連中とはつきあいくらい.....	はい		★	★★	★	25.0
問33 人は私を大酒飲みだと思っている.....	はい	★★	★★	★★	★★	65.0
問34 酒をのむより他に楽しみがある.....	楽しみがない			★★	★★	37.0
問35 年に二、三度はバカ騒ぎをして二、三日飲み続ける.....	はい					6.3
問36 酒を飲めばだれでも酔いつぶれることがある.....	はい		★★	★★		42.2
問37 酒を飲んでバカ騒ぎをすると素晴らしい気分になる.....	はい		★	★★		29.7
問38 前の日の酒のみ過ぎで翌日仕事を休んだり遅刻したことがある.....	はい	★	★★	★★		21.4
問39 飲んではならないとき(自動車の運転、当直など)酒をすすめられ てもとわる事ができる	できない			★	○	9.9

註1) 質問項目は昭和48年文部省科学研究(総合A)「問題飲酒の疫学的研究」班による。

2) X²-Testによる

★★: 飲酒頻度の多い群に肯定的回答者が有意に多い項目 (P < 0.01)

★: 全上 (P < 0.05)

○: 一方の群が少数のため有意差検定を行なえないが、両群間に差を認めうる項目

(): 飲酒頻度の少ない方の群に肯定的回答者が多い項目

Table 8 Classification of Questions by Alcoholic Traits & Group-ranking by Alcoholic Response Rate in Each Question

1 Regularity of drinking				2 Preference for drinking				3 Problem drinking				4 The others
No.	Rank			No.	Rank			No.	Rank			No.
	1.	2.	3.		1.	2.	3.		1.	2.	3.	
6	F	E	D	2	F	E	D	5	D	E	F	3
7	F	E	D	4	F	D	E	20	E	F	D	8
9	E	D	F	10	F	E	D	24	E	F	D	12
15	F	E	D	11	F	E	D	25	E	F	D	13
				18	F	E	D	26	E	F	D	14
				19	D	E	F	27	E	F	D	16
				21	E	F	D	28	F	E	-	17
				30	F	E	D	29	F	-	-	22
				32	F	E	D	31	E	F	-	23
				34	F	E	D	35	F	D	E	33
								38	E	F	D	36
								39	F	D	E	37

特長的なものは、問13:酒のういで事故や争いを起こした事がある、はC群で最も多いが、D、E、F群の中ではF群に少ない、また問22:うさばらしに飲む、もD、E群に比べてF群では少ない。

以上の点から飲酒慣行の特長を要約すると、毎日飲むF群は、何よりも酒が好きで規則的な飲酒を行うが、飲酒行動は安定しており社会的な問題行動はD、E群に比べて多いとは認められない、しかしアルコール依存の傾向を示している者が一部には認められる。これに対してD、E群は、飲酒のペースが一定せず、社会的に問題とされる飲酒行動が多く認められ、いわば飲酒慣行が不安定な群といえよう。

わが国に特有な飲酒形態として晩酌があり、その定義は大平⁴¹⁾、佐々木⁴²⁾らによって試みられているが問7:いつも決まった時刻に飲む(晩酌など)、に対してD、E、F群はそれぞれ33%、58%、88%が肯定している。佐々木⁴²⁾は毎日飲酒者の90%前後が晩酌をしているが、その量は多くは1.5合までであり、昼間から飲めない日本で育てられた健全な飲み方であるとしながらも、間隔を置かず毎日、過量に飲む場合にはアルコール依存になる危険性が大きいとしている。正常飲酒の限界については個人差も大きい体内におけるアルコールの酸化分解不全のための悪酔いを起こさない適当な量は2~3合までといわれている。²⁰⁾⁴³⁾ F群は晩酌型の飲酒群ともいえるが10%前後にアルコール依存の傾向が認められたことか

ら、飲酒量の調節が大切だと思われる。問題飲酒行動に関する項目に対しては、E群に肯定的回答者が多く認められたが、何をもちいて問題飲酒とするかは飲酒に対する価値基準が社会によりまた時代によって異なり、また適量が個人によって相違することから簡単にきめることはできない。今後、F群のみならずD、E群の動行にも注目して更に検討することが必要と考えられる。

IV 結 論

岡山県下農村部住民を対象として修正アルカド・テストによる飲酒慣行についての調査を実施し、以下の結果をえた。

1. 飲酒率は83.8%であるが、習慣的な飲酒傾向をもたない者は45.9%、毎日飲酒者37.0%を含めて飲酒習慣を有する者は54.1%であった。飲酒頻度は年令・職業によって差が認められ、50才以上では習慣的な飲酒傾向をもたない群と毎日飲む群に分れる傾向にあり、職業的には、サービス業、事務職、農林漁業、筋肉労働の順に飲酒習慣が強まる傾向がみられた。
2. 飲酒傾向を示すテストの得点数は飲酒頻度が増すに従って増加し、飲酒頻度の相違する群間では、平均得点数或いは得点数の分布に差が認められた。
3. 38質問項目のなか、飲酒頻度の異なる群間において飲酒傾向を示す肯定的回答の出現率に差が認め

られたものは32項目であり、これらの項目は飲酒習慣をもたない群と有する群とをよく弁別すると同時に、各群の飲酒慣行の特長を明らかにし得ることが認められた。

4. 毎日飲酒群は飲酒の規則性と飲酒嗜好に関する項目について肯定的回答率が高く、社会的に問題とされる飲酒行動に関する項目については、むしろ週4～6日飲酒群に肯定的回答率の高い傾向が認められた。何をもちいて問題飲酒とするかについて更に検討する必要がある。

5. 以上の結果より、修正アルカド・テストを更に検討して用いることにより、飲酒慣行を個人的にも

集団的にも明らかにし得ることが認められた。飲酒慣行は個人的要因のほかには時代の社会文化的環境に大きく影響をうけており、経時的な調査により、その推移を明らかにしていくことが必要である。

稿を終えるにあたり、本論文の御校閲をいただき、また懇切なる御指導をいただいた恩師大平昌彦教授及び青山英康助教授に対して深甚の謝意を表します。

なお、本研究は文部省科学研究費医学部門総合研究(A)問題飲酒の疫学的研究(昭和48年度)によるものであり第9回日本アルコール医学会で発表した。

文 献

- 1) H. M. Trice & P. M. Roman : Alcoholism and the Worker, Alcoholism (Edited by P. G. Bourne, Ruth Fox), 359-384, Academic Press, New York, 1973.
- 2) R. A. Von Wiegand : Advances in Secondary Prevention of Alcoholism through the Cooperative Efforts of Labor and Management in Employer Organizations, Preventive Medicine, 3(1), 80-85, 1974.
- 3) S. D. Bacon : Highway Crashes, Alcohol Problems and Programs for Social Controls, Alcoholism, 311-335, Academic Press, New York, 1973.
- 4) E. W. Fine & P. Scoles : Secondary Prevention of Using a Population of Offenders Arrested for Driving while Intoxicated, Work in Progress on Alcoholism, ANN. N. Y. ACAD. SCI. , 273, 631-645, 1976.
- 5) H. Wechsler : Alcohol Level and Home Accidents, Public Health Report, 84(12), 1043-1050, 1969.
- 6) P. G. Bourne : Alcoholism in the Urban Negro Population, Alcoholism, 211-226, Academic Press, New York, 1973.
- 7) F. A. Seixas : The Prevention of Alcoholism, Preventive Medicine, 3(1), 1-4, 1974.
- 8) M. E. Chafftz : Prevention of Alcoholism in the United States-Utilizing Cultural and Educational Forces-, Preventive Medicine, 3(1), 5-10, 1974.
- 9) R. Room : Governing Images and the Prevention of Alcohol Problems, Preventive Medicine, 3(1), 11-23, 1974.
- 10) D. J. Pittman : Alcoholism around the World-North America-, Work in Progress on Alcoholism, ANN. N. Y. ACAD. SCI. , 273, 5-8, 1976.
- 11) S. Stenccl : Resurgens of Alcoholism, Editorial Research Reports, 2(24), 989-1001, 1973
- 12) 国税庁関税部酒税課 : 酒のしおり, 1976.
- 13) 余暇開発センター調査研究報告書 : 現代社会における飲酒行動に関する研究, 1977.
- 14) 坂口謹一郎 : 日本の酒, 岩波新書, 岩波書店, 東京, 1964.
- 15) 額田繁 : 公衆衛生の課題としてのアルコール問題, アルコール研究11(3.4), 104-112, 1976.
- 16) 厚生統計協会 : 国民衛生の動向(昭和52年), 厚生指標, 24(9), 1977.
- 17) 中村省三 : アルコール多飲による肝病変, 肝臓, 7, 308-311, 1966.

- 18) 佐々木武史：産業精神衛生と飲酒，アルコール研究，4(3.4)，92～102，1969.
- 19) 小沼十寸穂：飲酒と産業医学，労働科学，48(2)，49～62，1972.
- 20) 大平昌彦，太田武夫，加藤尚司，吉田健男，上畑鉄之丞，五島正規，田村年行：各種労働者の飲酒の実態，産業医学，11(11)，553～562，1969.
- 21) 額田繁：飲酒と労働衛生，労働衛生，9(6)，8～13，1969.
- 22) 加藤伸勝，山根秀夫：アルコール中毒の予防とアフターケア，アルコール中毒（加藤伸勝，大原健士郎，河野裕明編），291～303，医学書院，東京，1973.
- 23) Max Hayman：アルコール中毒（大原健士郎訳），文光堂，東京，1968.
- 24) 額田繁：飲酒の衛生学，日本衛生学雑誌，31(1)，50～53，1976.
- 25) 科学技術会議：国民生活に密着した研究開発目標，1976.
- 26) 佐々木武史，松田昭，森忠繁，明石信爾，額田繁：重工業の従業員の飲酒と健康についての調査研究，アルコール研究，7(2)，36～55，1972.
- 27) 佐々木武史，中森英二，藤本幸雄，阪上佐知子：某電器産業従業員の飲酒の様態について，アルコール研究，7(4)，141～150，1972.
- 28) 安藤春彦，原美鶴：一般成人男子の飲酒状況（岐阜県多治見地方における調査），アルコール研究，1(2)，80～84，1966.
- 29) 小沼十寸穂，石津宏：広島県下における飲酒の様態に関する調査知見，広島医学，21(4)，268～275，1968.
- 30) 横山敏登：長崎県離島における海士の飲酒について，九州神経精神医学，20，182～188，1974.
- 31) 額田繁：飲酒習慣の疫学，診断と治療，58(5)，59～63，1970.
- 32) 額田繁：アルコール中毒の疫学，アルコール中毒，18～44，医学書院，東京，1973.
- 33) 高桑栄松：寒冷地の飲酒，日本の飲酒を考える（西川愼八，額田繁，上野佐編），62～79，医学書院，東京，1975.
- 34) 佐々木武史：晩酌と文化，日本の飲酒を考える，18～42，医学書院，東京，1975.
- 35) E. M. Jellinek：Drinking Pattern and Social Attitudes, The Disease Concepts of Alcoholism, 25-32, New Haven, Collegs and University Press, 1960.
- 36) M. P. Manson：A Psychometric Determination of Alcoholic Addiction, Amer. J. Psychiat. 106, 199-205, 1949.
- 37) 国税庁：酒類についての世論調査，1968.
- 38) 額田繁，佐々木武史，明石信爾，森忠繁：問題飲酒者のスクリーニングテスト，アルコール研究，12(4) 43～44，1977.
- 39) 大平昌彦，青山英康：最新公衆衛生学，20～21，学建書院，東京，1975.
- 40) 青山英康：小衛生学，263～268，金芳堂，京都，1976.
- 41) 大平昌彦，佐々木武史，福井忠孝：晩酌の定義について，アルコール研究，6(3)，121，1971.
- 42) Takeshi Sasaki：Research on Banshaku, アルコール研究，12(3)，67～79，1977.
- 43) 長嶺普吉：アルコールの栄養，労働の科学，22(10)，32～35，1967.

A study on drinking trait by a revised alcoholic addiction test

Keiji FURUICHI, M.D.

Department of Hygiene, Okayama University Medical School

(Chief director : Masahiko OHIRA, M.D.)

It is a very important problem in the field of public health among many Occidental countries to prevent against alcoholic addiction.

Recently, even in Japan the consumption of alcoholic beverages has increased considerably and especially drinking habit among women and young people is becoming more popular than ever before. Such tendency has changed drinking trait of old traditional drinking pattern in this country which had been fixed for a long time. Also it suggests that will raise more important problems in the field of public health in Japan.

There are several reports concerning with drinking trait in Japan but most of them were studied about special professional groups or residents of small area. Very few of population based studies have been reported especially in larger area on drinking trait.

This study has been done from the point of view that a population based study in larger scale is needed because it is considered to be very important in the field of public health to clarify a relationship between drinking trait and alcoholic addiction in Japanese society at large.

Method

One thousand examinees among residents of Okayama prefecture were randomized by means of telephone books excluding those in urban area.

A revised alcoholic addiction test (alcadd test) was mailed to these examinees. 519 answers gained were analysed.

Results were as follows:

- (1) Rate of drinking alcoholic beverages are as high as 83.8%. Rate of habitual drinkers is 54.1% and 37.0% have the habit of drinking everyday.
- (2) There are differences of frequency of habitual drinkers among different age groups and also differences among occupational groups.
- (3) The higher score on the alcadd test he gets, the more frequently he drinks.
- (4) As for 32 of 38 items, there are demonstrated significant differences of the frequency of alcoholic response to the alcadd test among groups classified by frequency of drinking.
- (5) The persons of a group who drink everyday have high rate of response to regularity of and preference for drinking.

On the other hand, those of a group who drink from four to six days per week have higher rate of response to problem drinking such as lack of control and social manner and so on, rather than those who drink everyday.

Conclusion

- (1) A revised alcadd test is useful for an analysis of alcohol trait individually and as a group.
- (2) Alcohol trait has a close relationship with social and cultural background.

The author, therefore, points out that the analysis of drinking trait should be necessary hereafter.